

ビバハウス便り NO.94 超高齢化社会への一石～“年寄り元気村”

2013年11月20日 ビバハウス 責任者 安達 俊子

今年も余すところ1ヵ月半となってしまった。入舟宿舎から3月に登町に帰り、改めて原点に返ってのビバハウスの生活で、若者たちは目を見張るような成長を見せてくれた。大半が本州からの若者たちは、近年にない豪雪を乗り切ったことも自信になってか、次々に新たな目標に向かって巣立っていった。

この春以降に新たに来た若者たちも、先輩たちの飛び立っていく姿に刺激を受けて、農作業中心のグループワークで、精神と身体を鍛え、アルバイトに、見習いから正規雇用へと果敢に挑戦を繰り返している。中には働きながら、雇用主の特別のご配慮でもうすぐ運転免許証を手にする若者も出てきた。

これまで、迫りくる「超高齢化・少子化社会」を支えるためにも、一人でも多くの引きこもりの若者の再生を目指して、大きな実績を上げてきた。現に全国から受け入れた若者たち数百人がそれぞれの地域に帰り、すでに就労したり、引き続き挑戦しているが、余市町内の各職場で、余市町民として就労している若者も10人をくだらない。この中には、有力な老人福祉施設の事務局長に就任し、重責を果たしている卒業生もいる。

しかし、医療の高度化や、さまざまな要因で高齢期を迎えている日本社会のお年寄りたちは、現在本当に幸せな毎日を過ごしているのだろうか？極端に言えば、その内実は寿命が伸びた分だけ悲惨としかいえないような状況を呈してはいないだろうか？「長寿」が本人にとっても、家族にとっても、そしてその社会にとっても心から歓迎される条件を作り出すこと。この最大の難題にビバハウス第2次基本構想として挑戦したい。お年寄りの皆さんに生きていることの喜びを実感できる「場」を作ることから始めたい。

幸い昨年ビバハウスから車で約10分ほど赤井川村方向に向かったところに約1万坪の山林を思いもかけない形で入手することができた。来年の雪解けから、希望するお年寄りの皆さんが、1日中何の拘束もなく、過ごしたいように過ごせる場作りに着手するために、年内の完成を目指して大型の木造仮設本部(倉庫兼用)を急ぎ建設中である。

現在はまだ大まかなスケッチしか描けないが、すでにお年寄りの皆さんの希望に合わせて、野菜栽培、ハーブや草花の栽培、いろいろなきのこの栽培(生えている木の種類に応じたさまざまなきのこの菌を植え付けた「きのこの森」作り)、さまざまなストレッチ運動、スケッチや絵画とお習字などすでに10名近いかたがたがボランティアの申し出をしてくださっている。

これまでのビバの生活で少しづつ力をつけてきた若者たちにも、お年寄りの皆さんの願いに応じたお手伝いをしてもらおうことが私の夢でもある。

